



## 21世紀に向う僻地教育研究施設の新たな展開に向けて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-04-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 後藤, 守 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/9685">https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/9685</a>

## 巻頭言

# 21世紀に向う僻地教育研究施設の 新たな展開に向けて

後藤 守

近年、へき地教育の実践やへき地教育を取り巻く地理的・社会的場の中に、「地域社会の教育力」「自然環境に融和し、自然を守る力」を生み出す土壌があることが、指摘されてきている。このことを、谷本一之前学長が、本施設の研究紀要の中で、いみじくも、次のような表現で明解に指摘している。「大規模になり過ぎて管理的な運営を強いられ、そのことの影響が登校拒否や校内暴力に象徴的に示されている現在の都市の学校教育の状況を打開するために、さまざまなことが語りはじめられています。全体に目くぼりの利くサイズの学校や、ヨーロッパ、アメリカ並みの小人数学級、体験学習の再認識、学校教育を活性化させるための地域の教育力のとり込み等々、生涯学習社会のなかの学校教育という新しい視点によるさまざまな改革試案は、現にへき地教育が行ってきている教育の内容そのものであると言えます。」この言葉は、端的に現代の学校教育の危機、荒廃を救う大きな手がかりを、へき地教育は持っていることを指摘していると見てよいであろう。「へき地教育は教育の原点である」という言葉が、単なる理念から脱皮して、教育実践の取り組みの中から実像として実態化してくる様相が指示されており、21世紀の学校教育を志向する教育関係者の指針として、この指摘は評価されよう。この指針に立てば、へき地校が都市の学校と比較してネガティブに見られがちであった、へき地小規模校の抱える課題が逆に、ポジティブな特性を内包していることに気づく。例えば、へき地小規模校の多くが採用している複式教育の形態についても、その形態の良さを積極的に活用すべきであろう。児童臨床の中でも、異年齢集団の持つ教育的機能は、大人のかかわりの持つ効果以上に重要な意味性を内包していることが、臨床的に明らかにされている。能力や特性において個人差のある子ども達が相互に力を補充しあいながら、時には障害を持つ子ども達も一緒に活動を共にし、時間と空間を共有する社会的場の提供はそれ自体、子どもの活力と活動の方向性を生み出す力を持っていると指摘できる。

このことは本施設の本年度の共同研究の課題でもある「環太平洋地域の遠隔教育に関する研究」においても同様に指摘されるであろう。一般に「遠隔教育」は都市から離れた地域が抱える、情報の落差を補整するといった側面から見られがちである。しかし、今回訪問したアラスカの北極圏の奥深い地域にある、ネイティブの人々が住む小さな村の学校での通信システムを利用した取組の姿勢は極めて前向きであった。そこの学校の生徒達はイスラエルの町の学校の生徒達と通信しあい、お互いの食文化の違いを通して、地理的、文化的違いを発見し、それらの事実を新鮮な感覚で受けとめあっていると言う。自分達の住む世界を積極的にアピールした

り、今まで気づかなかった自分達の住む世界をこれらの活動を通して再認識するという事は、ある意味では自分達の生活空間を安定化させる上で大きな意味をもつように思われる。

本施設が近年持ち続けている基本姿勢は以上述べてきたことに集約されるように思う。別な表現をすれば、本施設の研究の取組はわれわれが効率性を強く志向する中で、見落としてきた「社会的場」の持つ意味の再検討にあったように思われる。幸い、本施設はアラスカ大学フェアバンクス校、マガダン国際教育大学といったよきパートナーを得たこともあって、大学間協力による国際学術研究を組織的に進めることができた。アラスカ、シベリア、北海道という三極関係の中での小規模校の比較研究から浮かび上がってくる「地域社会と学校」「自然の中での子どもの生活」等の問題を通して、「地域社会の教育力の回復」「自然環境に融和し、自然を守る力を育てる」といった地球規模の21世紀の課題を集約的に抱えていることが浮きぼりにされたことは大きな収穫であった。また、山村へき地に対して「教育にとって悪い条件をもつ地域」という認識を越えた次元から研究を進める姿勢も徐々にではあるがわれわれの意識の中に定着しつつあることも、今後の研究にとって意味あるものとなろう。

本学のへき地教育研究施設は創設40年目を境にして、ひとつの大きな転換期にさしかかっている。本施設の活動の拠点を岩見沢校キャンパスに移すという新しい動きもそのひとつである。このことによって、より長期的展望の中で、本施設の将来構想の検討が可能となろう。全国的に見て、教育系大学や教育学部のへき地教育関連施設が閉鎖改組の状況にあって、わが国唯一のへき地教育研究施設として存続し続けていることを考えあわせると、本施設の課せられている役割は大きいように思われる。特に北海道は小規模校の比率が極めて高く、道内の小学校の5割は小規模校で占められていることから、へき地小規模校研究の重要性が指摘されている。願わくば、岩見沢校が現在、進めている小規模校教育研究センター構想と有機的に連動し、この広大な北海道の地をベースにして、21世紀の新しい教育を創造する国際的研究センターとして、成長して行ってほしいものである。

本施設創設40年の節目にあたり、その日が訪れることを待ち望む。

僻地教育研究施設長